ＳＩＤＥ Ｂ　第２回作品　「２０３０」

作・演出　クワハラーノ・チュースキー

〈登場人物〉

○早坂　桜　（ハヤサカ　サクラ）

■ピアノ演奏

※実際に演者が読むのはサクラの部分だけです。

M 1

1 オープニング

ヤナーチェクの曲が重く不安げに流れてくる。

しばらくすると、予言者のような存在が現れる。

無の空間を浮遊しながら、何かを見守っている様子。

語り　「神は言われた、われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造り、これに海の魚と、空の鳥と、家畜と、地のすべての獣と、地のすべての這うものとを治めさせよう……」

予言者のような女、明かりの変化とともに次第に女に変わっていく。

女　「私は……誰？」

M 2

2 家電製品の販売会場・昼

サクラがデモンストレーションを行っている。それを見つめる百人近くの客。

サクラ　「みなさん、こんにちは！　（会場「こんにちは」　）本日は「リスト」ご案内会にようこそお越しくださいました。本日、担当させていただきます、大日本次世代電子の早坂サクラと申します。どうぞ、よろしくお願いします。（拍手が起こる）あ、ありがとうございます。これからご紹介するのは、弊社が開発した、２０２２年の発売以来、６年間で世界累計販売台数５億台を突破する超人気商品、「リスト」です。（会場、

3　ある病室・個室

ガヤガヤ）みなさん、一度はこの名前聞いたことがありますよね。この「リスト」は今までのモバイルサービスとは違い通話やネット利用はもちろん、お客様のライフスタイルに合わせて様々な状況でご利用いただけるんです。「（ガヤガヤ）さあ、それでは実際に使ってみましょう！　まずは箱から出して手首に巻きます。（周りを見て）装着したらこの電源ボタンを押します。すると、ご覧ください！　目の前に仮想ディスプライが表示されました。この仮想ディスプレイはこのように指で画面サイズや向きも変更できるんです。また、リストにはセンサーがついておりまして、両手を合わせた位置にエアーパネルが表示され、お好きな位置で入力操作が可能、もちろんタッチ入力や音声入力にも対応しております。さらにリストの大きな特徴といたしまして、リストにお客様のお名前、生年月日などをご登録いただければ、お持ちのライフデータとも自動同期を行ってくれるので、身分証としても利用することもできます。この個人認証機能を利用すれば、ご自宅のドアもリストを使って鍵いらずになります。しかもこのリスト、万が一紛失したり悪用されそうになっても問題ありません。自分以外の人がリスト利用しようとしても、生体情報を識別し、エラー表示が出る作りになっています。（会場がどよめき）その信頼性は、世界各地に展開している、自衛軍でも採用されているほどです（会場、盛りあがっている）それだけじゃありません！　リストは、体内を流れる電流や脈拍から生活習慣や体調管理を自動で行ってくれます。これからの時代のスタンダード、「人生をまとめて管理するアクセサリー」リストは、皆様にこの上なく快適で、安全な生活をお届けします。今なら、政府からの補助金が一万円支給されております。ご購入されるなら今がチャンスです！　それでは只今より販売員が皆様のお席にデモ用機をもってご案内に上がります。ご不明点などございましたら、どうぞご遠慮なくお申し付け下さい」

M　3

ベットから身を起こして座っているサクラが、ある事件の取り調べを受けている。
刑事の質問に答えているサクラ。

サクラ　「仕事ですか？　はい、順調だったと思います。……ええ、大日本次世代電子には新卒で入社して約８年です。……業務内容は今色々騒がれている……そうです、リストのデモンストレーションをおこなっていました。……そうですね、確かに仕事には厳しい方かもしれません。生きがいっていうと大げさですけど、それくらいの覚悟を持ってやっていました。……まあ、後輩が私をどう思っていたのかもわかりませんが、面倒は見ていた方だと思います。……ええ、彼女は特にそうでした。……そう、本庄エマ」

M　4

4　販売会場・夕方

クレームを言っている客が一人残っている。

サクラ　「お客様、大変申し訳ございませんでした！」
客　「何だよ！　アイツの態度オカシイじゃねーかよ。こんなトコ二度とこねーよ」
サクラ　「誠に、申し訳ございませんでした」

客、その場を去る。

サクラ　「ふう、あっ、本庄さん、大丈夫だった？」

エマ　「はい」
サクラ　「ホントに大丈夫？　今のお客様に結構きついこと言われてたみたいだし…」
エマ　「私は問題ありません」
サクラ　「そう？　じゃあ、今のうちに次の回の準備をしておきましょうか。次は……シニアのお客様が多いから、資料は紙ベースのものがいいわね。これ、後ろの列においてくれる？」
エマ　「はい。……あの、どうして、私ばっかりああいうこと言われるんでしょう？」
サクラ　「うーん。ああいうクレームが多いのは……、本庄さんの対応がマニュアル化しすぎているっていうのが原因のひとつじゃないかな」
エマ　「マニュアル化？」
サクラ　「うん、対応に気持ちがないっていうか……お客様はひとりひとり違う方たちでしょう？　この仕事は、相手の気持ちを読んで相手の立場にたってお話ししなきゃいけないの」
エマ　「その、人の気持ちがよく分からないんです」
サクラ　「いや、そんなに大袈裟なことじゃないの。ただ、そのお客様は何を求めてるかって考える、それだけよ」
エマ　「それが苦手なんです」
サクラ　「うーん、じゃあ、お客様を友達だと思ってみたら？」
エマ　「友達はいません……」
サクラ　「……まあ、友達がいないんじゃ仕方ないけど……じゃあ、今晩、私と飲みにいく？」
エマ　「いや、結構です」
サクラ　「そうね。私と友達になってもしょうがないもんね……」

M　5

5　ある病室・個室

サクラが過去を語っている。

サクラ　「……そうですね、彼女が入社したのは私が大日本次世代電子に勤めて6年目のことでした。不思議な子だなというのが最初の印象でした。……ええ、なんていうか、世の中のことを知らないというか、何気ない冗談が通じなかったり、たまにすべてのことに対して無感情になったりとか……あっ、でも、記憶力のとてもいい子でした。一度指示したことは絶対に忘れないんです。……ただ、指示を出さないと何もしないというか……難しいですよね、人を育てるって」

M　6

6　ある販売会場の後処理

クレーム客に絡まれているサクラとエマ。

サクラ　「誠に申し訳ございませんでした」
お客　「こんな愛想悪い販売員、初めてみたわ！」
サクラ　「申し訳ございません。先ほどの担当者にはしっかりと指導致しますので」
お客　「これ、買うのやめるわ」
サクラ　「キャンセルでございますね。かしこまりました」
お客　「もう二度とこねーからな」
サクラ　「誠に申し訳ございませんでした！」

客、去る。

サクラ「ふう……このくらいで終わってよかった……」
エマ「すみません、ワタシのせいですね。ワタシ、この仕事向いてないと思います」
サクラ「確かに向き不向きはあるけど、本条さんはそれ以前に、お客様とちゃんと向かいあわなきゃ」
エマ「もっと具体的に教えてもらえませんか？」
サクラ「具体的って……じゃあ、さっきのお客様が「俺でもリスト使えるかな？」って言ったとき、本条さんは「どなたでも使えると説明書に書いてますが」って言ったわよね」
エマ「間違ってませんよね」
サクラ「うん、間違ってはいないけど、さっきの場合だとまず「どういうところがご不安ですか？」って聞いてあげた方がいいと思うの」
エマ「そうでしょうか？」
サクラ「そう。本庄さん、接客は「お客様に寄り添う」ものなの。だから、もう少しお客様の心ってものを理解しようとしてほしい」
エマ「寄り添うですか？」
サクラ「そう」
エマ「私は指示されたことをこなしています。心って必要でしょうか？」
サクラ「うーん、あっ、うちの部にもヒューマノイド販売部ってあるじゃない？」
エマ「はい。人口知能を搭載したヒューマノイドですよね」
サクラ「そう、あの人工知能を搭載したヒューマノイド達は、２４時間働けるからラーニングコストが私たちより全然安いの。文句も言わないし、常に均一なサービスを、半永久的に提供することができるしね。でもね、

実は私たち第一販売部の方が、ヒューマノイド販売部よりも、3倍の売り上げを上げているの」

エマ「そうなんですか？」

サクラ「意外でしょ、どうやらヒューマノイドの均一なサービスが、逆に仇になっちゃってるみたいなの。ヒューマノイドが人間を個別に認識するのはまだ難しいでしょう。それを不安に思うお客様が多いみたい。温かみのないロボットからは、あまり購入したくないって」

エマ「温かみのないロボット？」

サクラ「そう、温かみのないロボット。もしかしたら、本庄さんの対応にも似たような点があるんじゃないかなって感じることがあるの」

エマ「私がロボットだっていうんですか？」

サクラ「いやいや、本庄さんがロボットだなんて言ってないわよ。ものの例えだからね。あ、そうそう、例えついでにいうと、ロボットって語源はチェコ語の奴隷って言葉から来ているのよ。何の感情も持たず、ただ同じ作業を繰り返す奴隷。そうはなりたくないでしょ？」

エマ「……私は、奴隷じゃありません……」

サクラ「あ、いや、だから例えだって言ってるじゃない……本条さん、大丈夫？」

エマ「（無言で何も答えない）」

サクラ「本条さん……良かったら、この後、晩御飯一緒にいかない？　あっ、もちろん私がおごるからさ」

M　7

7　寿司屋・夜

カウンター席で、エマとサクラが話している。

サクラ「ね、珍しいでしょ。本物の魚介類がこれだけ揃ってるのは」
エマ「そうですね。はじめてみました」
サクラ「最近はＤＮＡ操作で作った人工魚類ばっかりだもんね。でも、ここのネタは全部本物の魚だから安心して。何か苦手なものはある？」
エマ「特にないです」
サクラ「わかった。あっ大将、おまかせ２人前で」
大将「はいよ！」
サクラ「絶対、美味しいから。本庄さんも喜んでくれると思う」
エマ「あの、今日はどうして私を？」
サクラ「いや、大したことじゃないんだけど、本庄さんのこと、もっと知りたくてね」
エマ「ワタシに興味を？　先輩は変わった人ですね」
サクラ「そうかな？　この仕事している人って、他人に興味がある人が多いと思うけど」
エマ「ワタシ、人に興味が持てないんです」
サクラ「確かに、今の時代は自分の好きな情報を選択して、自分の好きなモノに囲まれて生きていけるから、他人に興味を持つ必要なんかないもんね」
エマ「先輩は、なぜそんなに他人に興味を抱けるんですか？」
サクラ「なぜって……そうね、私の実家ってね、お寿司屋さんをやってたの。ここの大将は父の一番弟子でね。昔、私も店の手伝いをしてたの」
エマ「そうなんですか」
サクラ「ええ。よく父に、「サクラ、接客はお客さんに寄り添うようにやるんだ！」って怒られてた。だから、本庄さ

んへの言葉は父の受け売り」

エマ　「そうでしたか」

サクラ　「子供の頃は、そんな父の言葉をうるさいな位にしか思ってなかったんだけど、この仕事をするようになってだんだんわかってくるようになったの。お客様に寄り添うことは、お客様それぞれの心を見ることなんだって」

エマ　「心ですか？」

サクラ　「そうなの。人の心って、これだけ技術が発達しても、未だに値段や量で測れないじゃない？　人間の人間たるコアっているか……そんな人間らしいモノに直に触れることができる仕事をしてるから、より人間ってものに魅かれるのかもしれないわね」

エマ　「深い話ですね……でも、とっても面白いです」

サクラ　「珍しいね、本庄さんが笑うなんて」

カウンター越しに大将が寿司を置く。

大将　「はいよ」

サクラ　「あ、ありがとうございます。わあ、美味しそう！　さ、食べよっか」

M　8

8　ある病室・個室

サクラが過去を語っている。

サクラ　「ええ、あのあたりだった気がします。急に彼女が変わったっていうか、とってもやる気になったというか……とにかく別人みたいに一生懸命仕事をするようになったんです。それに、プライベートでも一緒に遊ぶようになりました……一緒に飲みにいったり、私の家に遊びに来たりとか……いえ、他に友達はいなかったと思います。エマは綺麗な子なんですけど、愛想がないというか……。……ええ、エマのことは、付き合っていた彼にもよく話していました……」

9　あるカフェ・夜

サクラを待ちながら、コーヒーを飲んでいるタクト。リストを使って残業を片付けている。

サクラ、遅れて到着する。

サクラ　「タクト、ゴメン！　残業で遅れちゃった。」

サクラ、カウンターへ注文に行く。

レジにいるのはヒューマノイドの店員である。

サクラ　「ええと……グリーンティー。支払いはリストで」

リストをかざして、先に会計を済ませる。

サクラ　「今日ね、大阪から来たお客さんがいたんだけど、なんとリニアで来たんだって」

タクト　「リニア……凄い人気だな」
サクラ　「うん、ほんとすごい人気だよね」
タクト　「昭和大復興運動の一環だもんな」
サクラ　「そうそう昭和大復興運動の目玉だもんね。昭和の新幹線を超える、天永のリニアモーターカー暁、日本の技術力を結集して、強い日本をもう一度！　なかなかうまいでしょ。販売でたまに使ってるの、このフレーズ」

M　9

10　ある病室・個室

サクラが過去を語っている。

サクラ　「松岡タクトは会社の5つ先輩でした……そうですね、彼はリスト開発の最前線にいました……結構、残業も多くて、休日もよく出勤していました。でも、それだけやりがいのある大きな仕事だったんだと思います。……私もそうですけど、彼もリストは世の中を変えるって言ってましたから……ええ、私と違って博学で世界に絶えず目を向けていて、……いつも何かを心配しているような人でした」

11　あるカフェ・夜

サクラ　「今度、一緒に乗りに行こうよ、リニア。良かったらエマちゃんも誘ってさ」
タクト　「ああ。それよりサクラ、社内ニュースみたか？」

M 10

サクラ「ん？　ちょっと今日忙しくて。何か変わったニュースがあったの？」
タクト「ああ、ちょっとヤバいのがね。今、そっちに送った」
サクラ「そうだったんだ、ありがと、みてみる。」

サクラ、リストからタクトが送ってくれた記事を見る。

サクラ「これね、えっと……えっ！　何これ、自衛軍第三小隊１００人が捕虜にって。ねえ、これってつまり、統一カリフ国が中東からの日本軍の撤退を求めてるってことだよね？」
タクト「撤退しないと宣戦布告するって言ってるしな」
サクラ「宣戦布告って、そんなことされたら本当に戦争になるじゃない」
タクト「だから大騒ぎしてるんだよ」
サクラ「これ元はといえばさ、５年前の９条改正だよね。あの時、改正したとたんに、日本がアメリカと共同して中東に軍事進攻して……」
タクト「そうだな」
サクラ「それで統一カリフ国の撤退要求をのまずに、「惨劇の土曜日」が起きた」
タクト「あれは悲惨なテロだったな」
サクラ「うん、ほんとに悲惨なテロだった……皮肉よね。自国を守るっていって、憲法改正したはずなのに、改正前よりも犠牲者が多く出てるって」
タクト「こうなるなら、しなかったかもな、改憲は」
サクラ「だから、私ははじめから反対だったのよ。だって、そうでしょ？　自国防衛のためって言って９条改正したのに、沖縄にはそのままアメリカ軍が駐屯してるし、北朝鮮は結局、革命で民主化されたし。全然、自

国防衛と関係ないところに派兵されてるしさー」
タクト「でも、軍事産業は失業対策にもなってるだろ」
サクラ「そうね。でも、それもおかしな話よね。ヒューマノイドが労働力になって多くの人が失業して、仕事を求めて兵役に志願するって、本末転送な気がするのは私だけなのかな？」
タクト「言ってて俺もそう思ったよ。……実は心配ごとは別にあるんだ」
サクラ「何？」
タクト「リストだよ。リスト」
サクラ「リスト？　……え、うちのリストのこと？」
タクト「中東で捕虜になった兵士のリスト経由でサイバー攻撃が始まっているかも知れないんだ」
サクラ「え？　じゃあ捕虜になった日本人の軍事用リストを使ってサイバー攻撃を仕掛けてくるかもしれないってこと？」
タクト「ああ。リストのセキュリティホールをついてな」
サクラ「（周りを見て声を落とす）セキュリティホール？」
タクト「いや、きちんとアップデートすれば問題ないと思うんだ」
サクラ「なんだ。アップデートで、改善できるのね？」
タクト「オレもそう信じたいんだが……いや、話題を変えよう」
サクラ「えっ、なんで、いきなり話かえるのよ」
タクト「俺たちは、今日何でここに集まったのか考えてみてくれ」
サクラ「あっ、そうだったね。そうだ、今日中に式の日取りを決めないとね。で、どうだった？」
タクト「とれたよ。式場。６月中旬なんだけど…ここでいいかな？」
サクラ「えっ、ジューンブライドじゃない！　わあ、嬉しいなー。うん、その日でいいと思う！」

M 11

12　ある販売会場・夕方

サクラ　「はあー、やっと終わった。エマちゃん、完売？」
エマ　「完売です！」
サクラ　「やった！」
エマ　「今日はすごかったですね」
サクラ　「ね！　エマちゃんの接客も、ホントすごかったよ。私、ちょっと感動しちゃったよ」
エマ　「ありがとうございます」
サクラ　「やればできるじゃない。その調子で頑張ってね」
エマ　「私……サクラさんみたいになりたいんです」
サクラ　「えっ？　わたしみたいになりたいって、どういうこと？　あ、販売についてもっと知りたいとか？　じゃあ、今夜飲みに行く？」
エマ　「はい」
サクラ　「よし、じゃあ早く片付けていこう！」

M 12

13　いつもの寿司屋・夜

数件酒場をはしごして、酔っているサクラとエマ。

サクラ「え！？　一軒目で呑んだワインって、エマちゃんの実家で作ってたの？」
エマ「たぶん、そうですね」
サクラ「ワイン畑がある教会ってなんだかおしゃれ。ご両親は元気でやってるの？」
エマ「……どうでしょう。ワタシ、父と大喧嘩して、家を飛び出してるので」
サクラ「お父さんと大喧嘩か……そっか、でもたまには実家に帰ってあげた方がいいよ。生きてるうちじゃないと親孝行ってできないんだから……あ、大将、これ（日本酒）お代わりで。あと、マグロ２つお願いします！」
大将「はいよ！」
エマ「先輩は、実家、帰ってますか？」
サクラ「私か……私、実家がもうないの」
エマ「実家がないって、何かあったんですか？」
サクラ「うん……私の実家ね１９年前の３・１１の時に津波に飲まれてなくなったの」
エマ「じゃあ、ご家族は……」
サクラ「うん、私は学校に行っていて無事だったんだけど、他の家族はみんな……」
エマ「……先輩、こんな質問するのも変かも知れませんけど？」
サクラ「何？　変な質問って何？」
エマ「生きる意味ってなんでしょうね」
サクラ「生きる意味、かあ。うーん、難しい質問だねえ。……学生時代に西洋哲学って授業があってさ、そこで「我思う。ゆえにわれあり」ってフレーズがあってね」
エマ「それ、デカルトですね」
サクラ「そうそう、デカルト。彼はたしか、自分がこの世界を認識できているんだから、自分は存在しているんだって言ってたのよね。だからそういうことでいいんじゃない？」

エマ　「ざっくりですね」
サクラ　「そうそう、ざっくりでいいのよ、そういうのは。ここに私とエマちゃんがいる。それが世界のすべてなのよ（日本酒が出てくる）あ、どうも。さあ、飲も飲も」

エマ、サクラについてあげる。

サクラ　「あ、ありがと。じゃあ、私も……」

サクラもエマにつぐ。
２人、日本酒で乾杯する。

サクラ　「はあー、美味しい！　お、エマちゃん早いね」
エマ　「先輩と飲むお酒、美味しいです」
サクラ　「ねえ、今入ってきた男の人、さっきの店にも来てたよね」
エマ　「黒服の男ですか？」
サクラ　「そうそう、あの黒服の。……なんか前にも見た気がするんだよね……もしかして、エマちゃんのストーカーとか？」
エマ　「たぶん、そういうんじゃないと思います」
サクラ　「そう？　何か困ったことがあったらちゃんといってね、私もタクトもいるからね」
エマ　「ありがとうございます」
サクラ　「ウチのエマに変なことしたらゆるさんぞーって撃退してやるから。あ、大将ありがとうございます！」

M12.5

大将　「なんだか二人は似てきたね」
サクラ　「えっ、似てきました？　私とエマちゃんが？」
エマ　「似てますかね？」
大将　「まるで妹みたいだよ」
サクラ　「妹か……そういえば、妹が生きてたらエマちゃんくらいだったのかも……」
エマ　「妹さんも津波で？」
サクラ　「そう、両親と一緒にね……さ、乾かないうちに食べよ。いただきます（本マグロ食べる）おいしい！
……ん？　エマちゃん、どうしたの？」
エマ　「なんだか、人の命って儚いですよね」
サラ　「人の命は儚い、か……そうね」
エマ　「ずっと生きていられたらいいのに」
サクラ　「うーん、そうだね。でもさ、いなくなっても一緒に過ごした思い出は残るよ。妹は私の中で生き続けている。それに今はエマちゃんっていう、新しい妹も増えたんだし」
エマ　「妹……ですか」
サクラ　「そうだよー、可愛い可愛い妹！」
エマ　「サクラ先輩」
サクラ　「ん、なに？」
エマ　「ワタシのことも覚えておいてくださいね」
サクラ　「えっ、どうしたの？　はは、今日は結構酔ったのね。大丈夫、エマちゃんみたいな個性的な子は絶対忘れないって。それより、次、何食べる？」

M 13

14　ある病室・個室

サクラ　「ええ、あの頃はリストの販売も好調で結婚も控えていて、自分の人生はそれなりに順調に進んでいると思っていました。……はい、あの日ですよね……正直なところ、あんまり思い出したくないんです。「破壊の３・１１」のことは……ええ、あの日、有給をとって故郷の墓参りをしていました。両親の墓前に結婚の報告をしようと思って……」

15　サクラの家族が眠る墓の前

高台にある墓石の前でサクラが祈りを捧げている。

サクラ　「私……みんなの分まで幸せになるね……」

リストが鳴る。

サクラ　「はい、もしもし？　あ、エマちゃん？　どうしたの？　……画面？　ちょっと待ってね……あっ、それ、どこ？　……リニアに乗ってるの？　すごーい！　どう、早い？　……いいなあ、私まだなんだよねー。って、その自慢で電話したの？　フフ……あ、そうだ。一昨日、式の案内状送ったんだけど、届いた？　……そっか、良かった。タクトも是非よろしくねって。それでね、昨日すごくうれしいことがわかって……実は、おなかにね……（大きな爆発音がする）きゃあ！　な、なに、今の音？　エマ、

M 14

大丈夫？　エマ、エマ！　もしもし、もしもし！？」

エマのリストが音信不通になる。

サクラ　「え……爆発してたわよね……そうだ、ニュース……」

サクラ、リストでいろいろなニュースチャンネルを検索する。

ニュースキャスター　「たった今入ったニュースです。東京大阪間を走行しているリニア―モーターカー暁が脱線事故を起こし炎上。自衛軍が救助活動に向かっています。中継映像です」

中継のキャスター　「ご覧ください！　信じられない光景が広がっています。昭和大復興運動の目玉だったリニアモーターカー暁が、大きく脱線、車両は大破し、ゴウゴウと炎を上げています！　まだ、こちらには消火部隊は到着していません！　中にはたくさんの乗客が取り残されたままです。このまま――」

ニュースキャスター　「中継の途中ですが、ただいま新しい情報が入ってきました。今回の事件に対し、統一カリフ国が犯行声明を出した模様です。内容は日本国に対する報復として自爆テロを行ったこと。日本国民にとって忘れられない日となるように3月１１日に決行したこと、即時撤退の要求を飲まなければ次は原子力発電所を襲う準備があるとのことです。政府は対策委員会を設置し、閣僚が緊急招集されている模様。あわせて、間もなく内閣官房長官の会見がはじまるとのことで……」

音

16　職場・昼

サクラが、人事課に詰め寄っている。

サクラ　「ですから、本庄エマが見つからないんです……そうですけど、会社だって社員の安否を確認する義務があるじゃないですか！　もっとちゃんと調べてくださいよ！　……えっ、どういうことですか、社員じゃないって！　……は、退社？　本庄さんがですか？　……そ、そんな……それ、いつの話なんですか？　……3月10日って……」

音

17　JR本社

サクラが事件の被害者情報を問い合わせている。

サクラ　「そうなんです、被害者リストにもいないんです！　……何度も同じこと聞いて申し訳ないと思ってます。でも、彼女は絶対乗ってたんです。私、話したんです。私、見たんです！　……どんな情報でもいいですから、教えてください！　……いえ、家族じゃありませんけど……でも私にとっては家族と同じくらい大切な人なんです！」

音

18　サクラの自宅・室内

サクラがリストでタクトと話している。

サクラ　「あっ、タクト。遅くにごめんね……えっ、まだ会社なの？　……えっ、リストの顧客サーバーに不正アクセス。そうなんだ……うん。今日も問い合わせてみたんだけど何の情報もなくて……あっ、それとね……気のせいかもしれないんだけど、最近誰かに見られている気がするの……電車の中とか、帰宅途中とか……えっ、思想犯？　私が？　えっ、でも、憲法改正についてダイヤリーに書いただけよ……えっ、そうなの？　それだけで逮捕されるの？　あ、あの、テロ対策の「みなし逮捕」法案ってやつ？　でも私が……うん、わかった。発言には気を付けるね……うん、大丈夫、じゃあね、お休み……」

サクラ、リスト会話を切断する。

M 15

19　女の夢

何かを探し求めている女がいる。

女　「流れてくるたくさんの記憶……あれは……誰？　……あれは……私？　……私は……私は……」

20　電車の中

サクラ　「エマッ！……夢？　……」

夢から覚めるサクラ。今見ていた光景が夢であることを悟る。

サクラ　「あっ、乗り過ごしてる！」

サクラ、あわてて電車を降りる。

音

21　大日本次世代電子・入口

息を切らしているサクラ。

サクラ　「ダメだ、完全に遅刻……」

サクラ、リストをかざすも、ドアが開かず。ピピーーというエラー音。

サクラ　「ん？　反応悪いのかな？」

サクラ、再度リストで認証をするも、ピピーというエラー音。

サクラ　「えっ？　何で？」

サクラ、何度か認証を行い、何度もピピーとエラー音が鳴る。
しばらくして警備員が来る。

サクラ　「あ、お疲れ様です……えっ？　私ですか？　ええ、社員ですけど。認証できなくなってしまったんです。……えっ、だから社員ですってば！　……は、不審者？　私が？　ちょっと冗談やめてくださいよ。私、今日も販売あるんで早くいかないとまずいんです！　……名前？　早坂サクラです。……社員コード。9899765321……は？　体調不良で休み？　いや、私はここにいるじゃないですか？　ちょっと身柄拘束って、ちょ、ちょっと待ってくださ、ちょ、ちょっと離してよ！」

追いかけてくる警備員から必死に逃げるサクラ。

音

22　社外・昼

サクラ　「ハアハア…ちょ、ちょっとどうなってるのよぉ。ああ、直接連絡すればいいんだ……」

リストから社内に連絡するサクラ。

サクラ　「もしもし。あっ、すみません。今入り口で警備員に止めら……えっ、私ですよ。早坂ですよ……は、課長、冗談なんて言ってませんよ……だから私は病気じゃありません！　会社の外にいますって……立ち去らないと通報する？　……ちょっと何いってるんですか！　課長、課長！　あっ」

リスト通話を一方的に切られてしまうサクラ。

サクラ　「どういうこと？　病気で休みって……誰がそんな連絡したんだろう？　ダメ、分からない。一度うちに帰ろう」

音

23　自宅前・昼過ぎ

自宅に帰ってくるサクラ。リストをかざすもドアが開かない。

サクラ　「何？　（何度も試す）嘘でしょ！　リストが壊れてるの？」

何度も試すも認証エラーで入れない。

サクラ　「……まさかね……」

サクラ、おそるおそるインターホンを押す。

女の声　「どなたですか？」

絶句するサクラ

サクラ「ちょっと、あなた誰？　ひ、人のうちで何してるんですか？」
女の声「はあ？」
サクラ「はあって……だから人の家で何してるんですか！」
女の声「変なことといってると警察呼びますよ」
サクラ「警察呼ばれるのはそっちでしょ。私の家に上がり込んで。いったい何なんですか！」
女の声「……」
サクラ「ちょっと！　聞いてるの！　もしもし！」
女の声「……」
サクラ「何なのよ……そうだ、タクトに……つながらない……どうしよう……」

近づいてくるサイレン音。
通報を受けた警察が近づいてくる。

サクラ「えっ？　通報を受けて？　……身分証ですか？　（リストをかざす）……違います。ここは私の家です！　中にオカシイ人がいるんですよ！　……はい、はい……だから、何度も言ってるじゃないですか、ここが私の家なんです……なんで私がどくんですか！　……ちょ、ちょっと押さないでよ！」

自宅の前から追放されるサクラ。

サクラ　「……なんでこうなるのよ！　私が何をしたっていうの！」

サクラの方に向かってくる警察。

サクラ　「何で……私が逃げなきゃいけないのよぉ……」

サクラ、その場から逃げるように去る。

音

24　街中・昼

サクラ、リストを使ってタクトに連絡を取っているが話し中でつながらず。

サクラ　「もう、何でタクトは出ないのよ！　いやダメダメ、こういうときこそ落ち着かなきゃ。……そ、そうよ、何かの間違いよ、きっとそうに違いないって。そ、そうよ。いったん落ち着こう」

音

25　あるカフェのカウンター

昼時で忙しい店内。グリーンティーを飲んで一息ついているサクラ。

会計しにレジに行く。

サクラ　「ごちそうさまでした。あ、支払いはリストで……えっ、残高不足？　いや、そんな……もう一度。……

……そうですか、すみません、それじゃ現金で……あっ、すみません、ちょっと持ち合わせがなくて、ごめんなさい！　そこのＡＴＭでおろしてきます」

慌てて店から出るサクラ。

音

２６　店の隣にある銀行のＡＴＭ

サクラ、ＡＴＭにリストをかざすもエラー表示。

サクラ　「もうほんとになんなの！　（再度かざしエラー）あなたがあなたであることを証明してください……なら、パスワードで……（認証エラー）えっ、そんなことないって（認証エラー）……なんでよ」

複数回間違えて、パスワードにロックがかかってしまう。

サクラ　「なんでロックかかるのよ」

音

２７　先のカフェ

サクラ、店に戻る。

サクラ　「あの……リストが故障しちゃったみたいで……お金、家に帰ってとってきます」

音

28　自宅・夕方

再度、自分の部屋を訪れるサクラ。インターホンを押して、誰もいないことを確認する。
リストをかざすも玄関のドアが開かない。

サクラ　「何で自分の家に入れないのよ！　……もうこれしかないわよね……」

サクラ、近くにあった消火器をもってガラス窓を叩いて割る。
窓カギを開けて自分の家に恐る恐る侵入する。

サクラ　「荒らされた感じじゃない」

サクラ、部屋の中を調べる。

サクラ　「なんだか、慌てて出てった感じ……ん？　なんで電源が？」

サクラ、電源が入っているデスクトップを見つける。

サクラ　「……あれ、私のダイヤリー……何これ？　記事が更新されてる！　……私、こんなこと書いてないし、こ

M 16

んなことした覚えもない……」

サクラ、自分のアカウントでログインしようとするもエラーが表示がされログインできず。

サクラ「何でログインできないの？　どういうこと？　私、パスワード変更してないのに。……もしかして、他も？」

サクラ、銀行のサイトにアクセスするもログインできず。

サクラ「銀行も……ダメ……じゃあ、市民データ……ダメ。データメール……ダメ。って全部ダメじゃない！」

サクラ、何度もパスワードを入力するも、すべてロックされていてログインできず。

不安と怒りが爆発するサクラ。

サクラ「もう、訳わかんない！　何で自分のアカウントにログインできないの？　何で何にも認証できないの？　おかしいよ、絶対！　絶対おかしいって！　……そもそも、このダイヤリー更新してるのは誰？　誰なの？……そうだ、コメント欄……」

サクラ、自分のアカウントのコメント欄に書く。

サクラ「（音声入力で）あなたは誰？（クリック）」。……（しばらくして）来た！「あなたこそ、誰？」……「あなたこそ、誰よ？　私に成りすますのはやめて！　（クリック）」……　「あなたこそ、何なのよ？」って…

…ふざけてるわ！　また来た。「あなたもしかして、エマ？」

頭が混乱してきたサクラ。その時、リストが鳴る。

サクラ「もしもしタクト！　何度も電話したんだよ！　……だって今日、朝からおかしいの！　全部が全部おかしいの！　頭が変になりそうなのよ……ねえ、聞いてる？　聞いてるの？　タクト？　タクト！　……えっ、私？　誰って、サクラよ。何いってるのよ。何これ、もしかしてあなたが仕組んだサプライズか何かなの？　そうやってみんなで私のこと、驚かせようと思ってるんでしょ。……タクト？……ちょっと、どういうこと、何がエマなの？　ねえ、ねえ、タクト！」

タクトから会話を切られてしまう。すぐにかけなおすもつながらず。

サクラ「誰も……私を……私だって思ってくれない……」

サクラ、その場に座り込んで呆然としてしまう。しかし、まだ脳の片隅には理性がっている。

サクラ「（深呼吸をして）よく考えて……今日、ここにいたのは誰だろう？」

悩み、考えるサクラ。しばらくして、ひらめく。

サクラ「もしかして……エマ！？」

サクラ、何かに気付いて、デスクトップで猛然と検索を始める。

音

29　長距離移動の電車・車内

ボックス席に一人座っているサクラ。向かいの席に乗ってくる旅行客。

サクラ　「ええ、どうぞ……ええ、青森まで……えっ、ニュースですか？　いや、まだ見てないです……
……え、大日本次世代ですか？　……防衛省と新型軍事兵器をですか？　……うちの会社が軍用兵器
を？　……信じられない……えっ、私を？　あの男性ですか。あ、あの人、エマのストーカー……？
じゃあ、やっぱりエマは……」

30　ある地方の郊外にある古い教会・夜

東京からかなり遠い、北の最果ての街にある教会。
外は雪が深く積もっている。

教会の扉を開くのを躊躇しているサクラ、決心して扉を開く。
中から時が巻き戻るような、ノスタルジーな音楽が流れてくる。

M 17

サクラ　「あっ、突然、すみません。あの、ちょっとよろしいですか……本庄エマさんの、お父さんですよね？　…

……えっ、私？　私、早坂サクラと申します……ええ、東京から来ました……どうしても、御嬢さんのお話が聞きたいんです……ここですか？　はい、以前、彼女が「青森のワイン畑がある教会」に住んでたって、教えてくれたことがあって……はい、実は彼女が突然会社を辞めて、……そうです。……ええ、東京の……大日本次世代電子です……えっ、ご存じないんですか……あ、いやでも、私一緒に働いてましたし……そんな、嘘じゃないです！　本当なんです……あっ、ちょっと待ってください！　何かご存じでしたら、教えてください！　私の人生がかかってるんです！　誰かが私に成りすましてて……（牧師教会の奥の部屋に消える）……せっかくここまで来たのに（牧師が戻ってくる）あ、戻ってきてくださったんですね……（何かのファイルを渡される）何ですか？　これ、開けても？　……（息が止まりそうになる）！　エマの死亡証明書……そんな……ありえないですよ、だってこれ日付が……5年前ですよ？　だって私は、ずっと彼女と……いえ……思い出させてしまい申し訳ありませんでした……（教会を出ようとするも）もし……何かあれば、ここに連絡ください……私、まだしばらくこっちにいますんで」

音

31　郊外にある安ホテル・夜

精神的に追い詰められているサクラ。色々と推理している。

サクラ　「……一体何がどうなってるの？　……疲れちゃった。……もう駄目なのかな……私」

用意していたナイフを取り出し呆然と眺めている。

その時、ドアがノックされる。

我に返るサクラ。ノックされたドアをゆっくりと開ける。

牧師　「夜分にすみません」
サクラ　「……あっ、本庄さんですか」
牧師　「少しお話ししたいことがありまして、入ってもいいですか？」
サクラ　「はい、どうぞ、散らかってますけど。あっ、これ何でもないです」
牧師　「早坂さん、大丈夫ですか？」
サクラ　「(から笑いして)、だ、大丈夫ですよ。私は」
牧師　「もしかして、自殺を考えたりしていないですか」
サクラ　「そ、そんな。自殺なんて」
牧師　「ならいいのですが……実は、あなたに聞いて欲しいことがあって。私の昔話をしてもいいでしょうか？」
サクラ　「本庄さんの昔話ですか……ええ」
牧師　「私の娘エマには姉がいまして。大層姉妹仲が良かったんです」
サクラ　「エマにお姉さんが？　その方はいまどこに？」
牧師　「若くして亡くなりました。不治の病でね……」
サクラ　「不治の病。そうでしたか」
牧師　「エマは、大好きだった姉を救えなかったことがトラウマになり、それから姉を生き返らせようとしました」
サクラ　「お姉さんを生き返らせる？　どういうことですか？」
牧師　「エマは猛勉強して工学部に入りました。そこで、人工知能の研究に没頭したのです」
サクラ　「エマが人口知能の研究ですか？」
牧師　「エマは大学を首席で卒業して、ヒューマノイド開発の仕事につきました。そこでエマは姉の記憶や遺品の

情報をすべて、ヒューマノイドに組み込んでプログラミングを行いました」
サクラ「それは、エマのお姉さんをヒューマノイドとして作るってことですか？」
牧師「そのようです。しかし、その研究を私は許すことができなかった。神がおつくりになった命を、人間が勝手に作り出すことは、私には容認できなかったのです」
サクラ「人間が命を創造する。牧師さんである本庄さんが受け入れられないお気持ちはよくわかります。それで？」
牧師「エマと大喧嘩になった末、私は娘を勘当しました」
サクラ「勘当？　それで家を出たんですね……」
牧師「ええ。……それから……しばらくして、仙台であの事件が起きたのです」
サクラ「仙台……あっ、「惨劇の土曜日」ですか？」
牧師「はい。あのテロ事件に巻き込まれて、娘は帰らぬ人になりました」
サクラ「そうだったんですか……じゃあエマさんは……テロで……」
牧師「（声が震えて）私があの時……娘の研究を許してやれば……こんなことには……」
サクラ「本庄さん……」
牧師「（嗚咽して）娘がテロに巻き込まれたのは……私のせいです」
サクラ「テロに巻き込まれたのは、本庄さんのせいじゃないです。そんなに自分を責めないでください。」
牧師「これを見てください」
サクラ「えっ？　随分たくさんの書面ですね」
牧師「娘の遺品の中に入っていました」
サクラ「じゃあこれは、エマさんの遺品ですか？　拝見しても？」
牧師「もちろんです。どうぞ」

M 19

サクラに書面を渡す。

サクラ「（めくりながら）……防衛省？（じっくりと書面を読む）えっ……全人格情報譲渡契約書？」
牧師「その先を読んでみてください」
サクラ「ええ、……もし本庄エマ・甲が死亡した場合、大日本次世代電子・乙のサーバーに保存されている、甲のこれまでの全生体情報および記憶データ情報は、すべてヒューマノイド研究のために、乙及びその開発研究機関に完全譲渡する……これってもしかして……（頭の中にあるパズルを組み立てて）私が一緒に働いていたエマは……つまり、彼女はヒューマノイドにエマさんの記憶を実装した、ロボットってことですか？」
牧師「そうかも知れません」
サクラ「信じられない。だって、エマは誰がどうみても完全な人間でした」
牧師「しかしそうとしか考えられません……」
サクラ「そんな……でも、仮にエマのヒューマノイドが存在したとして、私の存在が奪われてしまったこととどういう関係が……」
牧師「何か身に覚えはないですか？」
サクラ「……そういえばエマは、私になりたいって、よく言っていました……けど、それだけで？」
牧師「わかりません……ただ」
サクラ「ただ？」
牧師「先ほど、私のところに、見知らぬ男女が訪ねてきました」
サクラ「見知らぬ男女ですか？　彼らは何を？」
牧師「彼らは、エマのこと、そしてあなたについて知っていることを教えて欲しい、といっていました」
サクラ「エマと私の情報ですか？　なんで？　……その２人、どこにいるかわかりますか？」

M 20

３２　あるホテルのロビー・夜

外は雪がしんしんと降っている。
ホテルのロビーでホテルマンと話しているサクラ。

サクラ　「すみません。８８８号室には……ありがとうございます」

音

３３　８８８号室の前

サクラ、深呼吸をしている。その様子が過度になっている。

サクラ　「ここに……エマが……」

サクラ、なかなかノックできず躊躇している。
覚悟を決めたサクラ。部屋のブザーを押す。
鍵が開き、ドアが開く。
中から出てきたのは……タクトだった……

サクラ　「！（驚きのあまり声が出ない）タ、タクト……ど、どうしてあなたがここに……」
タクト　「お前……」

M 21

サクラ「何なのこれ！？　ねえ、あなたも関係してるの？　あなた何でエマのお父さんに会いにいったのよ！　ねえ、ここで何してるのよ！！」

動揺しているサクラ、タクトを押し込んで部屋の中に入る。
すると……中には、サクラがいた……

サクラ「！　な、なんで私がいるの……なんで私がいるのよぉ！」

混乱してその場に座り込む、サクラ。
サクラをそっと抑えようとするタクト。

タクト「もう、終わりにしよう」
サクラ「何が終わりなのよ。一体どういうことなの？　これがヒューマノイドのエマなの？　私の人格を奪ったエマなの？」
タクト「落ち着くんだ。破壊の３・１１の時に、統一カリフ国から受けたサイバー攻撃は覚えているだろ？」
サクラ「なんで、いきなり、サイバー攻撃の話なのよ。今は関係ないじゃない」
タクト「その時にリスト社のサーバーに不正アクセスして、サクラの情報をダウンロードした奴がいるんだ」
サクラ「どういうこと？　じゃ、その混乱に乗じて、私の情報が盗まれたっていうの？」
タクト「ただの記憶じゃない。全人格情報、つまり、早坂サクラのありとあらゆる情報がリストのサーバーに保存されていたんだ」
サクラ「全人格情報！？　私のありとあらゆる情報がリストのサーバーに……？」

M 22

タクト　「サクラだけじゃない、リスト利用者全員のデータだ」
サクラ　「利用者全員！？　そ、そんなこと、許されるの？」
タクト　「だが事実なんだ」
サクラ　「そんな……じゃあ、私が今まで販売してきたリストは、お客様のありとあらゆる情報をサーバーに無断でアップさせていたってこと……」
タクト　「君が悪いんじゃない。悪いのは会社側・そして政府だ」
サクラ　「そんな……でも、大勢いる利用者の中から、なぜ私の情報が？」
タクト　「それは、お前が知ってるはずだ」
サクラ　「私が？　私が知ってるはずないじゃない」
タクト　「はっきり言おう。犯人は、オマエだ」
サクラ　「なんで、私なの？　私が私の情報を盗む訳ないじゃない」
タクト　「違う。お前は早坂サクラじゃない」
サクラ　「タクト、何いってるの？」
タクト　「何度でもいう。お前は早坂サクラじゃない」
サクラ　「冗談やめてよ。私は早坂サクラよ」
タクト　「お前は……エマだ」
サクラ　「え？　わ、わたしが……エマ……？」
タクト　「お前はサクラじゃない。エマなんだよ……」
サクラ　「そんな訳ないじゃない……私は私よ」
タクト　「いい加減に目を覚ませ！」
もう一人のサクラ　「エマ…もうやめよう」

サクラ　「やだ、こないで！　私はエマじゃない！」
タクト　「お前は……人間じゃない。ヒューマノイドなんだ」
サクラ　「私が……ヒューマノイド……絶対嘘よ！　そんなことあるはずない。私には記憶がある、感情もある」
もう一人のサクラ　「エマ……お願いだから目を覚まして」
サクラ　「やめてよ！　あなたはいったい何？　私の人格をのっとった挙句、私をヒューマノイド呼ばわりするの？」
もう一人のサクラ　「もう、やめよう」
サクラ　「いいわ……私、証明するわ……」

サクラ、ポケットに入れていたナイフを取り出す。

タクト　「な、なにをする気だ？」
サクラ　「私の血で私を証明する」

サクラ、勢いよく自分の首を刺そうとする。
が、ナイフの刃を掴んで、それを阻止するもう一人のサクラ。

サクラ　「な、なんで……エマが……」
もう一人のサクラ　「え、エマちゃん……もうやめよう」
サクラ　「……どうして」
もう一人のサクラ　「エマ……もういいの。アナタをこれ以上傷つけたくないの」
サクラ　「私のために？　……私のために……私のために……サクラ先輩の手が……！！」

《ここからは演者はエマを読む。》
サクラの表情が、歪みその中から、今まで消えていたエマの表情が出てくる。

M 23

エマ　「先輩、ごめんなさい。ワタシのせいで、傷を負わせてしまいました」
サクラ　「……エマなの？」
エマ　「はい……ワタシは研究所では「エマ」と呼ばれていました。でも、その記憶もデータ提供者・本庄エマの記憶を加工して移植したもの。ワタシは何者でもないんです。ワタシはこの世界で人工知能と認識されていますが、人間社会で人間と完全同化する実験が終わったら、戦地に投入される予定のただの軍事機器なんです……サクラ先輩、ずっと黙っていてごめんなさい」
サクラ　「エマちゃん、どうしてそんなことを？」
エマ　「理由……ですか？　あの日、３月１１日、ワタシは軍事基地に輸送される途中でした。そこで、リニアが爆発した……ワタシは逃げました。最後にもう一度、サクラ先輩に会おうと思ったんです。しかし、東京に戻ったときには研究所の人間がサクラ先輩を見張っていて近づけなかったんです。そんな時、リストサーバーのセキュリティホールを知りました。もう会えないなら、せめてサクラ先輩の全人格情報に触れたい、そう思い先輩の情報を私にインストールしました」
サクラ　「それで私に……」
エマ　「ワタシはサクラ先輩の心をもっと知りたかった。でも、プログラムのバグによって、ワタシの記憶にサクラ先輩の情報が上書きされて……私は自分がサクラ先輩と誤認していたようです」
タクト　「でも、それならどうして今エマの記憶が残っているんだ？」
エマ　「ワタシにとって大切な記憶を、誰にも決して消せないところにバックアップをとっていたんです。それが

さっきの内的衝動によって自動回復したみたいで……サクラ先輩、ごめんなさい……ワタシは最後まで先輩に面倒をかけました」

サクラ「いいのよ。だって、あなたは、私の妹なんだから」

エマ「妹？　そうでしたね……うっ」

サクラ「エマ……？」

リストが急に怪しく光りだす。苦痛の表情を見せるエマ。

サクラ「エマ、どうしたの？」

エマ「ワタシ……先輩たちの結婚式に出たかった。先輩の妹としてお祝いしたかった」

タクト「どうしたんだ？」

エマ「でも、もうダメ……研究所がデータの配信を始めました……私の記憶は完全にデリートされて……もうすぐワタシはなくなる……」

サクラ「エマ、行かないで！　」

エマ「……（ふと笑って）お願い、あなたは覚えていて……ワタシがいたこと……お願い……サクラ先輩……さよな……」

完全にエマの記憶が消されていく。一筋の涙がエマの頬を流れていく。

完全に記憶を消され、その場に倒れるエマ。

M 24

36　ある病室・個室

M 25

キャスター　「…以上、防衛大臣の会見でした。次のニュースです。大日本次世代電子がウェアラブル端末リストを経由してユーザーの生体情報や記憶メモリーを極秘で収集し、秘密裏に政府に提供していた問題について、プライバシー権および、基本的人権を不当に侵害したとして、リストの顧客や人権問題を扱っている弁護士団は、大日本次世代電子や国に対し、集団訴訟を行う構えを見せています。
続いて、混迷を極める中東情勢です。日本軍と統一カリフ国との膠着状態が続いておりますが、防衛省が昨日、新たに創設したヒューマノイド部隊を戦線に投入しました。わずか１３体という少数部隊ながら一日でバグダッドを制圧する活躍を見せましたが、兵力に勝るカリフ軍に包囲され、激戦の末全滅した模様です。防衛省は今回の結果を踏まえて、さらなるヒューマノイド部隊の構築に……」

サクラ　「そうです、あの日、自宅で休んでいたら、私と名乗る人物がやってきました。身の危険を感じた私は、タクトの指示通り、すべてのパスワードを変更し、リストを破壊し、自宅を離れました。……ええ、その後タクトと合流し、エマの真実を聞きました。それから二人で青森に向かったんです。……その後のことはもうご存知ですよね……エマの反抗をすべて研究所が把握していたこと、それでも実験を継続して、エマの動きを観察していたことは後で聞きました。私を傷つけたことで実験は終了し、記憶を失ったエマは研究所の関係者……いつも私たちを見ていた、あの男に連れていかれました（悔しさがにじむ）そう、今あなたの後ろにいる彼です。私は……エマを守れませんでした……彼女に何もしてあげられなかった……だけどせめて、彼女が最後に残した言葉だけは……彼女と過ごした思い出だけは、忘れないように生きていこうと思ってます……この子と共に。……そうなんです、ええ、今５か月目で……女の子だそうです。名前はもう決まっていて……真実を映すと書いて、映真（エマ）」

【Fin】